

わらべうたあそびによる保育その4

○ 佐々木 孝子

佐藤 雅子

(大崎広域ほなみ園) (宮城教育大学)

大崎広域ほなみ園は、知的障害児の通園施設で未就学児24名(定員30名)がバスで通園している。

職員は12名(園長1、指導員8)である。

これまでは、わらべうたあそびの取り組みの具体的方法について示し、更に、事例を挙げながら成長の過程について報告してきた。

ほなみ園では、子どもの育つ環境を更に豊かにする為に、親子によるわらべうたあそびを取り入れているが、今回は、その取り組みの方法と、親子の関わりが育つ過程について述べる。

1. ねらい

(1)子どもとの関わり方を母親にも学んでほしい。



抱っこすることが苦手な母親と、抱っこされることが苦手な子どもが触れ合いの体験を通して親子の絆を深めていく。

(2)ほなみ園で実践していることを理解してほしい。

親子わらべうたあそびを通して、他の子の様子をみたり、他の母親と触れ合うことにより、子どもの行動や特性を冷静に見つめることができる。同時に、保育の姿勢を理解することができる。

(3)日常の保育ではできないことを、親子研修で実現したい。



多くの人との出会いは大切である。特に障害児にとっては配慮されなければならないことである。

少しの手助けがあれば、集団あそびとしての展開ができ、関わっ

てあそぶ喜びを体験することができる。

VTR ①「こんこんさん」②「ゆっさゆっさ」

2. 母親を支える親子わらべうたあそび

「親子わらべうたあそび」の感想

○ S・A児の母

1回目のわらべうた研修は、みんなの輪を遠くからながめているような感じでした。2回目は、母の膝の上に座って、とても良い表情で参加していました。帰りの車の中で「おおやま、こやま・・・」をやってくれとでもいうように、私の指をつかんで、眉のところにもっていきました。

不思議なことに、わらべうたには子どもの心を捉える何かがあるように思いました。ことばを喋れなくて、人とのやりとりがまだうまくできないわが子でも、わらべうたは大好きです。母に甘えたいとなると膝にすっぽり座って、母の指をひっぱって、やってくれとせがみます。コチョコチョした時の何ともいえないかわいい笑顔がみたくて、母も毎日やってあげています。

子どもとどうやって遊べばいいのかわからなかった私にとって、教えていただいたわらべうたは、とても役に立っています。

VTR ③「おおやまこやま」



○ H・M児の母

昨日初めてわらべうたの研修会に参加しました。どのうたも初めて聞きました。一番驚いたことは、わらべうたというのは、うたといっても、特別難しい音階がある訳ではなく、母親が子どもに話しかけていることばがうたになったのだと思いました。

親が子どもを抱っこして、手をつないで、ほっぺを触って・・・親子が触れ合えるととても楽しくてすばらしいものだと思います。

○ Y・Y児の母

ことばの出ない子とのコミュニケーションには、いつも悩んでいます。してほしいこともわかるだけに、つい手を貸したくなるし、私以上に本人の苛立ちがわかると辛くなります。

人間はかまわれることで育っていくということ、うなずけるのですが、なかなかこちらからかまわあげたくても、拒まれてしまう現状をどうしたらいいのでしょうか。しかし、抱っこもおんぶも大好きです。機嫌の悪い時でもこうしてあげるとおちついてくれます。大切に思っていることも抱っこおんぶで分かってくれているのでしょうか。

わが子と一緒にわらべうたをあそぶことで、母親自身も、心地よいものを感じていることがわかる。

発達の未熟さや、障害による独自の表現に戸惑っている母親が、わが子を丸ごと受けとめる希望や自信を得て、これからの育児を前向きに歩む為の支えになるだろう。

3. 親子関係の育ち

重度重複障害の男児O・S児

3歳6ヶ月～6歳4ヶ月

(入園当初の様子)

- ・ 首が座っておらず、座位がとれない。物をつかむことができず全面介助の状態である。
- ・ 食事は流動食に近い刻み食である。
- ・ 友だちの関わりや刺激に対して、精神的にも身体的にも硬直してしまう。
- ・ TVや音楽を好むが、視線を合わせたり追視することは苦手であり、表情の変化はあまりみられない。

VTR ④「ちいさいなみ」



母親のうたう声を聞き、「あーお母さんだ」と嬉しさを表現している。

ゆっくりだが、しっかりと気持ちを伝える手段を学んでいることがわかる。

(様子の変化)

- ・ 体重がふえてきた。
- ・ 定時排泄で排尿できるようになった。
- ・ 名前を呼ばれると、絞り出す様な声で応える

様になってきた。

- ・ 家族以外の人でも受け入れ、笑顔をみせる様になってきた。
- ・ 母親の腕から離れ、椅子に座って活動に参加できるようになってきた。

母親は入園当初は、健康管理に細心を払い、こどもを守る姿勢であった。しかし、集団生活を通じて様々な刺激を受け、徐々に体力がつき表情も豊かになってくる様子を実感し、わが子の中に潜む可能性を発見する様になってきた。そして、徐々に意欲的な関わりを始められるようになっていった。

4. まとめ

人間関係は母と子がスタートであり、その絆が強ければ強い程、子どもは外に目を向け飛び出していきける。「好きよ」と言うだけではなく具体的にかわいがることが大切で、一つのことばを発するより、心にしめる関わりが大切である。

人間の発達は、つまり人間関係の発達であり、母が働きかけることによって子どもは必ず応えてくれる。中には母親にしか返してもらえないものもあり、そのことが子育ての励みになる。



子どもが豊かに育つ為に、家族との連携が重要であり、これからもこの親子わらべうたあそびを大切に続けていきたい。

親と子のつながりを深めるわらべうたあそび

- ・ 抱っこしてあそぶ
「よいこよいしょとだっこして」
- ・ 顔なでやくすぐってあそぶ
「ここはとうちゃんにんどころ」
「おおやまこやま」
- ・ ゆさぶってあそぶ
「ゆっさゆっさもものき」
「うまがはしれば」

参考文献 「わらべうたによる音楽教育」

本間雅夫・鈴木敏朗共著